平成12年（2000年）5月1日毎月1回1日発行　協力　CAL／松竹京都映画撮影所／大映ビデオ／WOWOW

Kyoto Hollywood News
京都ハリウッド通信

ひとまず「怪」は撮影終了
焼き肉を食べながら振り返った主役の感想はペンギンに感心？

撮影作業を残すものの、ひとまず全4作の撮影が終了と相成った「怪」。打ち上げの場では撮影中の「ポッとひといき」ではない、「ホンマにホッとした人ひとときな、役者達のプライベートな表情が溢れるもの。写真もそんな折りの、お約束「焼き肉パーティ」をモチーフにした打ち上げでの一葉。スクリーンや画面で見るあの人々が、ぐっと身近に感じる瞬間だ。大きな仕事を終えた出演者達の笑顔と団欒…。

さて上掲、田辺誠一に思い浮かんだ「楽しかった念思いで話」はペンギン。そう、南氷洋に生息するあのペンギンが、田辺誠一の脳裏に浮かびたかった。それは「怪」其ノ参「赤面あびす」のロケーションで琵琶湖の北端・海津大崎に向かった2月のある日――。

当日の予定表の片隅に書かれた、用意する小道具や機材の中に「ペンギン」と書かれているのを田辺は発見した。「時代劇にペンギン？」もちろん脚本にはただの一行もペンギンは登場しない。

田辺はまさかとは思ったが、何でもありの「怪」の事。しかも今回の舞台となる島には、様々な漂流物が流れ着く設定なので、それもありかと納得。それどころか酒井鮎貴の演出手腕に絶大なる信頼を寄せている田辺は、「さすがに酒井鮎貴、引き出しが多いなあ」としきりに感心。

CD-ROMや自主映画の製作も手掛ける田辺の創造力は、「ペンギン」の4文字によって刺激された。しかし、到着したロケ場所では猛吹雪と積雪のため、撮影は中止。とうとうペンギンとの対面とはならなかった。

帰りのバスで残念な田辺は、「ペンギンって、あのペンギンですよね？」とボソリ。しかし、ペンギンとはスタッフが水に入って作業をするために用意する、胴体まであるゴム長靴の呼び名。「あ、そうなんです、か」真実を知った田辺、又市の衣装のまま、金田一風に照れ笑い、頭をかいた。

写真は所内で催された焼肉パーティーにて。険しい表情の又市から一転、好青年・田辺誠一に。奥には佐野史郎の顔も

インタビュー実現！待て次号!!

近日、田辺誠一のインタビューもご紹介この撮影中のりりしい顔とは違う優しい表情での登場となる予定。乞うご期待

総決算！「怪」其ノ四
「福神ながし」は超豪華出演陣!

去る3月15日でシリーズ総決算「福神ながし」の撮影を終了。フィナーレにふさわしい豪華出演陣が集結した。当初から4作のシリーズ化が決定していたので、それぞれに特色を持たせようと企画。特に最終作は前3作で築き上げた世界を、いい意味で如何に打ち破るかを討議。結果、あっと驚く仕掛けが満載の娯楽大作が完成した。

京極氏御本人の他にも、荒俣宏氏、宮部みゆき氏、稲葉稔氏、今野敏氏ら有名作家に加え、妖怪漫画の大御所・水木しげる先生が特別出演。俳優陣も谷啓、火野正平、小木茂光ら、これまでのメインゲストが集結。そこに近藤政臣、船越英一郎、岸部一徳、杉本哲太ら豪華ゲストが顔を揃える。放映はWOWOWにて9月下旬の予定。乞ご期待！

強力メンバー集結！左から第2作「隠神だぬき」の谷啓、第1作「七人みさき」の小木茂光、第3作「赤面あびす」の火野正平

久々定番ネタっ！
役者の胃袋を満たす味
日本映画の定食・「つたや」

以前にソバを紹介したことがあったが、今回、久々に日本のハリウッド・京都を「食」で支えた一軒をご紹介する。それがこの大映通り商店街にある食堂「つたや」だ。女将の山本和子さんは「私のおじいさんの代から店をやっていて、大映さん、松竹さん、東映さん、そしてたくさんのプロダクションがありましてね、そら活気がありましたわ」と、往時を懐かしむ。

「その当時はテレビやなくて本編（映画）だけですやろ。一つの撮影所だけで週に3本も4本も撮影してて、店の後ろまでオープンセットでしてね。かつらを付けた役者さんがようけ、普通に歩いてました」

つたやは当時も今も撮影所への出前を請け負っている。開店以来、京都で活躍した巨匠や大スターから大部屋の俳優さんまで、あらゆる映画人がこの店の暖簾をくぐり、出前を注文した。言わば日本のハリウッドを「食」で支えたのだ。

劇中に登場する料理は「消え物」と呼ばれる。その消え物を用意するのもつたやだ。テレビ時代劇などで食べられる料理のいくつかは、つたや製である。「黄昏の七人」や「王様と私」で有名な、かのハリウッド・スター、ユル・ブリンナーが大映京都撮影所を訪れた時、毎日出前を届けたのも、つたや。注文は決まって幕の内弁当だったとか。

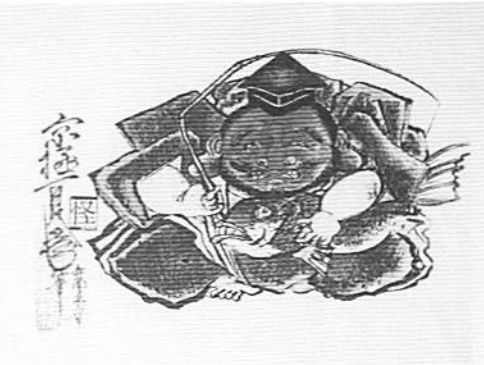
大映京都撮影所が閉鎖後、勝新太郎は勝プロダクションを設立。スタッフや俳優を引き連れて、よく来店したという。あなたが映画ファンならば、つたやで食事をすればきっと、格別の味がするに違いない。

「つたや」は京福電鉄帷子ノ辻下車・三条通りから大映通り商店街に入ってすぐ。お昼の豆ご飯定食が人気。毎週日曜定休

こちらが「つたや」の女将・山本和子さん。女将というより、みんなのお母さん、と呼びたくなるのがこのテの店のいいところ

超プレミア！ 京極夏彦直筆タイトル画

シリーズを通じて使用される、オープニングのタイトル画は京極氏の直筆。彼が「絵心も相当」と言うのは有名な話で、もはや立派なプレミア物。当初、エンディングの画も同じ物で統一する予定だったが、劇場用にオープニングの画を描き改めるにあたり、エンディングもそれぞれテーマに合わせて違う画にしようと、3枚の直筆画が追加された。作品で登場するのはエンドロールが終わって「終」の字が出る、本当に最後の最後。エンドロールが流れると、席を立つ客も多いが、映画ファンならエンドロールが終わるまで、じっくりと鑑賞したいもの。怪はエンドロールの最後の最後まで、お楽しみ下さい。



同じく京極氏直筆「赤面ふびす」エンドタイトル画。七福神の一を見事におどろおどろしく描いているのは流石！

京極夏彦氏直筆！「鬼神だぬき」エンドタイトル画。少々スリムな狸ではある。京極氏の好み？

今月の言葉

「怪」の撮影は終了したが、3、4作の仕上げはこれから。撮影もさることながら、編集、ダビングを経て完成するまでの工程も、また楽しい。この楽しさをもう一度味わうために、企画を準備し、実現のために奔走するのも楽しい。でも夢を実現するのは決して「楽」じゃない。人生楽あれば苦あり。そんな事を考えつつ、次なる企画書を作成中の今日この頃。

2000年5月1日　山田誠二

責任編集人　山田誠二
1963年生まれ。京都を拠点に、映画のプロデュース、脚本、評論の他、コミック原作など多方面で活躍の作家。映画関連著作多数執筆。

忘れられない京都の名画劇場

全盛時のスタジオを拝見「スタジオはてんやわんや」（大映・1957年度作品）

「つたや」のおかみさんも懐かしむ様に、往時の太秦は映画の町として活気にあふれていた。映画黄金期に「夢の工場」として輝いていた大映京都・東京撮影所の賑わいを伝えてくれるドキュメンタリー映画「スタジオはてんやわんや」（監督・浜野信彦）が、今回初のビデオ化となった。

京都撮影所が生んだ看板スターと言えば、やはり市川雷蔵と勝新太郎。勝夫人・中村玉緒も大映京都撮影所育ちの女優で、いわば職場結婚。祇園のお嬢様女優・中村玉緒に勝が一目ぼれし、熱烈な求愛の末に結婚したのは有名な話。

スタジオ案内の合間に、雷蔵と勝の他、長谷川一夫、京マチ子、中村玉緒らオールスターが歌や踊りなど隠し芸を披露するという、記録として貴重、娯楽として至れり尽くせりの贅沢な作品。特に雷蔵と勝の日本舞踊は必見だ。

これが必見の鳥肌が立つようなシーン！雷蔵と勝の日本舞踊。

大映京都撮影所の看板スター勢揃い。左から中村玉緒、市川雷蔵、勝新太郎、長谷川一夫

「スタジオはてんやわんや」大映ビデオより6月9日発売。（3800円／税抜）